

# 源氏物語における古物語性の問題(一)

目 加 田 さ く を

## (I)

源氏物語は十一世紀後葉の日本に現れた一古物語である。それが如何に傑作であらうとも、又、世界に未だこれと言ふ小説が出現してゐなかつた古代において、先がけて創作された一大長篇であるといふ榮譽を荷ふに足る作品であらうとも、それは反面において、当時世界の小説そのものが未だしにかく稚く幼なかつたが故に、源氏物語も亦、幼稚と蕪雜を免れ得ない古物語である事にかはりはないのであり、それだからといつて、毫末も源氏物語の価値が傷けられるものではない事、もとよりである。その事は、二十世紀のビューリツア賞受賞作品 *The Grapes of Wrath* において、その簡素な説話手法——本筋の展開の章(偶数章)間に純然たる説明の章(奇数章)を設置介入させてゐる如き——は、小説における構成への腐心を揚棄したものゝ如くであるが、その事の為に当該作品の価値が幾分マイナスになつてゐるなどと

は簡単に言ひ得ない、と言ふ事情と甚だ相似てゐるのである。

少くとも源氏物語に関する限りでは、竹取物語を始祖とする——源氏物語絵合巻によれば——一系列の古物語群なる基盤の上に立つ源氏物語を想定し、源氏物語のむしろ古代的幼稚さを正當に考慮に入れなければ、換言すれば、近代の小説觀をもつて古物語源氏物語の、殊に成立論が觀察考究される様な場合には、源氏物語の理會にずれが生じて来るのではないか、と思ふのである。源氏物語はそれ以前の所謂古物語に対し、全然それを脱皮した物語であるとして截然と區別する立場、それも勿論可能である。しかし乍ら、それにしても源氏物語は古物語群より誕生した物語であるから、それに多少とも古物語性の残存する事はやむを得ないであらうし、従つてそれが或る場合、たしかに宿命的な弱点であると考へられる事も認めないわけにはゆかないであらう。そして従来源氏物語の価値は、源氏をそれ以前の所謂古物語と対照する操作によつて明瞭になつて来るところの、源氏におけるいはゞ非古物語性——古物語より脱皮しえてゐる分野——に求められてゐる

が、逆に古物語性の面からしばらく考へてみようと思ふのである。さて古物語性の問題において、筆者は源氏物語の場合その古物語性は簡単に価値判断の資とすべきではなく、それを一つの様式として受容する事が先決問題であらうと思ふのである。因に又、新資料の出現しない限り、現存形を一応認め、従つて、現存源氏物語をもつて源氏物語とし、一古物語源氏物語として認める立場である。

## (I)

日本小説史において、十一世紀前葉迄の小説、即ち、小説の平安朝の形態たる物語の前期、所謂古物語の系流に属する作品群にあつて、それらを支へてゐるところの主たる性格をもつて、かりに「古物語性」と一応みなす事が許されるならば、次の通りであらうと思ふ。

### 一、説話手法上より

#### (1) 語り手(地の文)の存在

即ち、語り手が、当該事件事柄を関知しない第三者に語つてきかせるといふ立場である事——多くの場合巻末、少くとも話が一段落つく終りにおいて物語り手が顔を出す場合が多い。描写乃至写真ではなく、描写乃至写真してきかせる人が存在するのである。

#### (2) 内容の紹介に先立つて、常套的冒頭形式の存在

当該事件事柄の生起した時代、場所、関係者たる人物名、即ち「時」「所」、「人」の三設定が先づ冒頭になされる事である。しかもその時代が古いもの程、三設定が具さに事実忠実に叙される

のである。

イ 時代……過去

……某帝某年某時

ロ 場所

……某国某郡某郷

ハ 人物名……実名より仮作へ……何某

過去の某年某月、我が国の某国某郡某郷で何某(実名)の子又は子孫何某がいかなる行動をし云云といふ、事実譚の古形を原形とし、それが逐次、仮作化してゆく過程にありながら、その三設定が不完全ながら残つてゐるのである。

### 二、主要人物

主要人物については、絶対的(理想的)人間像をもつてそれにあつてゐる。心理、情緒の展開が抽象的である。

### 三、構成

構成は極めて簡素な

#### 1、伝記構成

#### 2、連珠プロット

両形式の採用に終り、しかも、構成における腐心の揚棄乃至無関心が指摘されるのである。

以上について、少し詳かに例証してみようと思ふ。

#### (1) 語り手の存在

「今は昔……」に始まり、縷々内容たる事件事象を叙し来つて、その終末を「……と(ぞ)」で結ぶ説話の展開法は、上代の語部或は一般古老の相伝によつて伝承されて来た「ものがたり」の古形であり、最も本質的な特徴である。語部の伝承を髣髴とさせる古事記の諸説話はそれが包蔵する歌謡の末句においてすら、

許登能迦多理基登母許遠婆

記歌謠二、三、四、五、

一〇三、一〇二

(岩波文庫、記紀の  
歌謠ニヨル)

の一句を附加してゐるのである。次で、物語類の先驅をなした九世紀の説話集、日本国現報善惡靈異記においては、例へば  
：：東人現世被大福、是乃修行験力、観音威徳の如く、筆者たる薬師寺の僧景戒が日本において現に善惡報をうけた靈異の事件事象を讀者たる第三者に物語つてその人を教化するといふ立場であるから、当該事件事象に関する彼の批判乃至訓戒が必ず附加されるのである。

十世紀に出現した物語においては、

竹取物語 「今は昔：：その煙いまた雲の中へ立ち昇るとそいつたへたる」

伊勢物語 「昔：：となむよみてやりけるさる歌のきたなげ

さよ

みさしてかへりたまひけるとなむ

若からぬ人はきゝおひけりとや

平仲物語 のちはいかゞなりにけん

わらはみてきぬいかゞなりにけん

かくことはそや

とはいふものか

大和物語 ……とて心にも悲しと思ひけむいかゞおもひけん

しらずかし

……いとうとましく覚ゆる事なれと人の言ひけるまゝなり

……後はいかゞなりにけんしらず

……帰らせおはしましたるとなむ

……これをなむ世の人もとをはとかくつけたる元は

……かくのみなむありける

宇津保物語 …… 暁にかへり給ふとなむ

……残は次々にあるへしとそ

……おほし宣はぬなしとなむ

……これより下にあれとえかゝず

落窪物語 …… かゝずとも儀式ありさま思ひやれ

……あこきは二百までいけりとや

といった物語り手の詞を介入或は附加してゐるのは、歴史物語大鏡の場合意識して構成的に用ゐてゐるのであるが、共に、内容となる或る事件事象を関知せざる第三者にものがたつてきかせるといふ物語本来の姿である。そして、此の種「：：とや」「後いかゞなりにけんしらず」といふ風のこくめいに語り手の口吻を写したもののから漸次「御はかしなと奉り給ふ」「尉四人散楽四人松明ともしたり」といった写真乃至描写と物語り手の口吻との入りまじつた叙述調に移行するのであるが、試みに巻末だけを眺めたところでは、宇津保において前者四、後者十六の割合である。即ち、古物語においては、後者の如き叙述調を基盤として、時々「：：とや」「いかゞなりにけんしらず」式のいかにも語り手の口吻を写した文句の介入があるといふ状態である。それこそ、物

語が、あくまで「ものがたり」であつて近代の描写された小説と異なる点である。但し勿論、近代の小説においても蘆刈の如く作中人物に「ものがたり」をさせ、その談話筆記の体裁をとるものは別である。

(2) 常套的冒頭形式

時、所、人の設定を最初にやつてしまふといふのも亦、いかにも古物語の態度である。それも亦、紀記、風土記以来の古形の残存である。それを九世紀の先行文芸日本国現報善惡靈異記、浦島子伝も踏襲した。

雄略紀 二十二年秋七月丹波國余社郡管川。水上浦島子。……  
 丹後風土記 丹後國與謝郡日置里筒川村筒川島子……  
 浦島子伝 雄各天皇二十二年丹後國水江浦島子……  
 靈異記 慶應二年九月十日 豊前國宮子郡 膳臣應國……  
 後岡本宮御宇天皇代 難波百濟寺 尺義覚……  
 更にそれを古物語も踏襲したのである。

作品名	時	所	人
竹取物語	今は昔	野無山	讃岐造磨(仮名)
○伊勢物語	むかし	春日野	男
○平仲物語	いまはむかし	その他	男
大和物語	深草帝と申しける時 正月	清水寺 その他	良少將(実名) 小野小町

落窪物語	今は昔	(京)	某中納言(仮名)
宇津保物語	むかし	(京)	清原俊陰(仮名)
(住吉物語)	(むかし)	(京)	(某中納言女)
篁物語	(過去タル事ハワカル)	(京)	(篁の名巻末にあり)
○多武峯少將物語	(常套的冒頭なし)		

紀記風土記、靈異記以来の、実録風の物語は、明遠且忠実に、「時」「所」「人」の設定を巻頭にもつてくる。心境小説乃至私小説系のいわゆる日記物語は事実を架空のそのの如く、主要人物名も、男乃至女と抽象化し、本格的作り物語竹取物語、落窪(住吉)宇津保物語は創作を事実の如く人名を何某と設定するといふ風に方向は逆であるが、矢張り共に、時、所、人の設定を冒頭に置かなくては「物語」が進められないかの如き無形の拘束をうけてゐるものゝ如やうである。しかも「時」は原則として過去であるが、過去の感じの少い、いはゞ現代と呼ばれうるもの——大和物語——も出て来てゐる。「所」は地方性を喪失し殆ど凡てが「京」となり、もはや「京」と記す必要すらもない様になつて来てゐる——平仲、落窪、宇津保、住吉……。篁物語では主要人名が冒頭になく巻末に来、多武峯少將物語(高光日記)では全くかゝる常套的形式の冒頭を欠いてゐる。九世紀迄は具象的に何年何月と記してゐた「時」の設定も「今は昔」「昔」等と一般的に遠い過去として設定する様になつて来た事、等々は、事実伝承性よりの脱皮運動であり、創作への接近であると考へられるのである。「時」「所」「人」

の三設定を冒頭になすべしといふ、伝説話時代からの習性的無形の拘束を如何に感じてゐたかに、古物語性の濃淡が判別される様に思はれるのである。「所」、「人」は上述の如く殆ど拘束を感じなくなつて来た。残る「時」の設定が「物語」の世界では容易に脱皮出来ないものである。それは「語り手の存在」と共に、遠い過去に生起した事件事象を第三者に「ものがたる」といふ、物語としては実に本質的な要件あつたからである。

### (二) 主要人物

古物語の主人公は絶対的（理想的）人間像をもつてあてられる。竹取物語の「かくや姫」宇津保の「俊蔭」落窪の「姫君」それを救つた「左近少将」等は、その美において、その叡知、才幹、或は人柄において又社会的な立身出世において理想的である。そこには神変不可思議さへ生じて来る。——竹取、宇津保——。従つて、主人公に仇をしたり、冷淡であつた人々に対しては痛快極らない報復がなされる等、その容易さはけだし人間界の現実とはあまりにへだたつてゐるが、古物語筆者はそれを意に介しない。それは上代叙事詩時代にあつて英雄を偶像視した名残であると想はれる。偶像から人間へ、その移行がいかななされつゝあるかにも亦、古物語性喪失の過程が窺はれるのである。

### (三) 構成

古物語の構成は、二つの著明な特徴をもつてゐるのである。即ち、その一は伝記体構成である。

#### (1) 伝記体構成

一英雄の出生に始り、成長するにつれて起る種々の事件を逐時叙述し、命終る時に及ぶといふ、説話構成法は、至極簡單幼稚な方法の一であつて、これ亦、記紀、風土記以来の方法である。例へば、記の小碓命（倭建命）譚において、景行天皇の御子達の系譜に始り、(1)大碓命誅伐、(2)能曾征伐(3)出雲建征伐(4)東国征伐——(イ)草那芸劔と御囊の為に難を免かれる(ロ)弟橘比売命入水(ハ)伊吹山の神征伐——(5)能煩野病死(6)葬送に到る古代の代表的英雄日本武命の若い生涯が叙せられ、最後は如何にも古代の浪漫的英雄の死を飾るにふさわしい哀切な国思ひ歌、愛刀を思ふ歌をもち、更に白馬となつて大空に飛翔し去るといふ叙情の話で結んでゐるのである。

この様な日本生得の伝記構成法は、更に大陸の先行文芸作品、殊に唐代伝奇と呼ばれる絢爛たる一群の小説の影響、示唆をうけ、その刺激によつて平安初頭の知識層は浦島子伝を生み出したのである。即ち、唐代伝奇とは、例へば李娃伝、鶯々伝、梅妃伝、楊太真伝、馮燕伝等々の如く、その主人公の伝記、その生涯中最も華麗、哀切なりし時代の伝記を記すのであつて、冒頭に例へば

○汗国夫人李娃長安之娼女也節行環奇有足称者故監察御史白行簡為伝述。天宝中有常州刺史宋陽公者……有一子始弱冠美……

○大歷中隴西李生名益年二十以進士擢第……夏六月至長舍於新昌置……

と「時」、「所」、「人」の紹介を試み、人に到つては詳細に素姓を

かき列ねるのである。本来、伝記的構成の素質をもつ上に、これを啓蒙し、示唆影響を与へた先行の小説形態が、甚だ相似た伝記体構成の唐代伝奇であつたから、一層根強い性向となつてしまつたと想はれる。竹取物語は「かくや姫一代記」落窪は「落窪姫の一代記」多武峯、篁、伊勢物語、平仲物語等は「男」の一代記、宇津保は父子三代に及ぶ清原俊隆一家のいはゞ伝記なのである。

## (2) 連珠プロット

例へば、前掲倭建命譚において、(1)(2)(3)(4)(5)(6)の小話は、時間の経過に従つて、主人公倭建命といふ緒によつて貫かれてゐるところの一系列の小話群、連珠プロットからなる倭建命生涯の伝記なのである。既に古事記の時代において、構成上この様な形式の存在する事は顕著な特質とみななければならない。この形式は物語の時代に入つても、竹取物語は「かくや姫」を緒として六或は七の小説話群が貫かれてゐる一環の構成であり、伊勢物語、平仲物語は、男によつて貫かれた百二十五話よりなる、或は四十話からなる連珠プロットの構成である。宇津保物語は俊隆父子三代が緒となつて展開する長篇である。連珠プロットであるから、竹取物語、伊勢、平仲の各説話間の関係の如く、前後の關係は全く無い、唯、主人公が同じであるといふだけにとどまる場合が普通である。この連珠式プロットは單に記紀以来の構成上の癖といふよりも、むしろ、かゝる構成をとらざるをえなくした国民的心象の本質的な一面であつて、長篇例へば宇津保物語における如く、長篇における

短篇性、短篇の集りたる長篇にすぎないのである。短さを性格にもつものが大きくなる場合の造型法、小く集つて一系列として長くも大きくもなる方法である。此の伝記構成と連珠式プロットの重なりあつた説話構成が古物語を支へてゐるのである。そして、この簡素な構成に容易に従つて、構成上の苦勞をしないのが古物語である。例へば竹取物語において、前半の五人の貴公子失敗譚はそれ／＼同時にかくや姫をめぐつて活躍し乍ら、相互全く無關係であり、翁の年齢が、初めは「翁年七十にあまりぬ、今日とも明日ともしらず」と語らせ乍ら、昇天の際は「この事をなげくに髪も白く……翁今年五十許なりけれども物思ひには今時になむ老になりにけると見ゆ」とすまして実にその場／＼で都合のよい事を勝手に言はせてゐる。それを責めてはならない。この様なミスなれかしと腐心する事を、竹取作者は夙く揚棄してゐたのである。逆にいへば、それが古物語の特徴であるといふべきである。凡そ以上の特徴ある性格が十一世紀前葉迄の古物語を支へてゐる本質的性格と認め、かりに古物語性と呼んで置く事とする。

## (I) 源氏物語における古物語性の概要

### (1) 語り手の存在

桐壺 いつれの御時にか……光君といふ名は高麗人のめで聞えてつけ奉りけるとそいひ伝へたるとなむ

常木 光源氏名のみことくしう言ひけたれ給ふとかる多かんなるにいとゝかゝるすき事どもを末の世にも聞き伝へてかるひ

たる名をや流さむと思ひ給ひけるかくろへ事をさへ語りつたへける人の物いひさかなさよさるはいといたくを憚りまめたちたまひける程になよひがにをかしき事はな、交野の少将には笑はれ給ひけんかし……（なか／＼あはれにおほさるとそ）

室蟬……………

夕顔……………

斯様のくた／＼しき事は強ちにかくろへ忍び給ひしもいとほしくて皆もらしとどめたるをなと帝の御子ならむからに見む人さへ片はならず物ほめがらなると作り事めきてとりなす人もし給ひければなむあまり物いひさがなきに非ざりところなく

と言ふ様な、冒頭と対照して巻末で結ぶ語り手の詞もあれば、昔物語にも物得させたるをかしき事には数へつゝけためれどいと煩くてこちたき御中らひの事とはえそ数へあへ侍らぬやの如き、巻中随所に「抄筆の際の弁解の詞」を語り手が言ふ場合がある。前例で分る如く、作者は意識して古物語の体裁を保たうと企てたのである。

## (2) 常套形式の冒頭

いつれの御時にか女御更衣あまた侍ひ給ひける中にいとやんことなき際にはあらぬかすくれて時めき給ふありけり

過去のある時代、宮中に、さる後宮がゐた、と「時」、「所」、「人」の形ばかりの設定がなされてゐる。これを同じく十一世紀並に十二世紀の

親はありくとさいなめ…… 「玉藻に遊ぶ」

○まちつけたる花橘の香も昔の人恋しう…… 「逢坂こえぬ」

少年の春は惜めとも留まらぬものなりければ…… 「狭衣」等、「時」、「所」、「人」の三設定に反撥を感じて新機軸を出した短篇、中篇の諸作に比較すれば、従来の常套形式を容易に受容してゐる事「いつれの御時にか」と脱皮しかけながら、遂に矢張り習性的な常套形式の拘束にとらはれてゐる。反面から言へば、伝記構成をとる長篇である為に必然的に出生に先立つ母の素姓から説き起さねばならなかつたのである。

## (二) 絶対的理想的人間像

源氏物語前篇の主人公光君は理想的絶対的存在である。それだけ前篇は作り事らしさが、換言すれば、古物語らしさが感ぜられる。光る君は（かぐや姫＋昔男）に甚だ近いのである。後篇になると、董も匂も相対的人間像をもつてあてられる。即ち容貌も完全ではない美しさ、

この君は……顔かたちもそこはかと何処なむすくれたるあな清らとみゆる所もなきが唯いとなまめかしう恥しけに心の奥多かりげなる気はひの人にぬなりけり香の芳はしさその世の匂ひならずあやしきまで打振舞ひたまへるあたり遠くへたてたる程の追風もまことに百歩の外に薫りぬへき心地しける

光る君の如く類稀なる容貌ではなくなり高尚な心性の反映であるところの上品優雅な顔の感じになつてゐる。それだけ前進してゐながら、身体より滲み出る不思議な香気を帯びしめてゐる事の

為に、竹から生れたかぐや姫、旋風にのり、花の露をなめて暮したといふ俊蔭と同類に墮して了つたのである。

### (三) 構 成

#### (1) 伝 記 構 成

源氏物語は光る君、夕霧、(薫、匂、)といふ源氏の父子三代に及ぶ伝記である。と見る事は、宇津保物語の場合より一層妥当である。光る君の出生に先立つ母の素姓、母の境遇から叙せられてゐる。巻々で光る君の年齢をことわるのも、長篇である源氏が、出生、少年期、青年期、壮年期をへて晩年に向ふ事を明瞭にする為である。猶源氏の伝記構成に於いて、いかにも未熟の感を与へるのは、説話進行上、逆行的説明、Aの動作からBの動作へ移行したとしながら、ふつとAの説明を加へる癖である。

例へば

姫宮はあやしかりし事を思し歎きしよりやかて例の様に  
おはせず……かく悩み給ふと聞召してぞ渡り給ふ(女君は暑くむつ  
かしとて御髪すまして少し爽やかにもてなし給へり……歌の贈  
答アリ)

見奉る事もさく／＼なかりつるをかゝるくもまにさへやは絶え  
こもらむと思したちて渡り給ひぬ 若菜下

( )内は源氏が女三宮でなく紫上との贈答であり、その後  
源氏は女三宮邸へ出かけるのである。

常により給ふ東面の柱を人に譲る心地し給ふも哀れにて姫君  
檜皮色の紙の重ね唯いさゝかにかきて柱のひわれたるはさまに

筭の先して押入れ給ふ

今はとてやとかれぬともなれ来つる真木柱は我を忘るな  
えもかきやらでなき給ふ母君

なれきとは思ひ出つるとも何により立ちとまるへきまきの柱ぞ

御前なる人々も……

真木柱

柱のひわれに歌を筭の先で押し入れ給ふと、ことわつてから、その歌をよむ姫を叙し、その歌を「えもかきやらでなき給ふ」といふ前後逆の叙述のし方は何と言つてもまだ推稿の余地があると思はれる。いはゞこれも古物語の無関心の一ではあるまいか。

#### (2) 連珠プロット

源氏物語は宇津保物語、更には竹取物語、伊勢物語等と同様に連珠プロットを安易に採用してゐる。一卷、或は二巻三巻に亘つて一説話を構成する数多くの群小短篇物語が、主人公光る君——及びその子孫——によつて貫かれて一環の長篇物語が成立してゐるのである。時としては、例へば、若紫で北山に行つた光る君が祈禱の際にあたり風景を賞する際、明石入道の女(明石上)の噂を良清等にさせてゐる如き伏線も用ゐられるが、馬琴等の構成的な行き方とは全く異り、構成上のミスには無関心で只管恋愛心理の陰影、人や物にむけられるいたり深いもののあはれの感懐を具に捉へようとしてゐるのであつて、例へば桐壺と帝木との間のつながりは現行のまゝでも差支なく、いはれる様に必ずしも輝く日の宮の存在を可能とはしないのである。構成上水も洩らさぬ結構を古物語は意図してゐないからである。